

硯 滴 考

[5]

令和元年九月吉日

公益財団法人

大平正芳記念財団



硯
滴
考

[5]

目次

はしがき	4
吉田さんと池田さん	6
吉田さんとチャーチル	12
吉田さんとユーモア	17
池田さんと富士山	21
欠点の美——一つの池田勇人観	26

秘書官の役得	30
津島蔵相の思い出	38
大学生活―一橋ファミリーの情愛	43
大学生活―忘れ得ぬ恩師たち	48
中井虎男先生と三豊の天地	53
大平総理の最後の手紙―没後20年ぶりに発見 鈴木岩男	57

はしがき

『硯滴考』が早くも第5号を迎えました。毎号への温かいご支援に対し感謝申し上げます。

大平の恩師・恩人への尊敬の念と報恩に実を尽くす陰徳は、生涯変わることはなかったようです。弊財団では、大恩人として、池田勇人総理、津島寿一蔵相、加藤藤太郎翁（同郷で旧制中学・大学の先輩）、上田辰之助先生（大学ゼミの指導教授）、中井虎男先生（旧制中学の恩師）の顕彰のために、大平正芳記念館（香川県観音寺市）に特別コーナーを設けています。

ということで、本号は右の特集号（別格の戦後保守本流の祖・吉田茂総理を含む）とさせて頂きます。月旦評に定評のある大平の恩師・恩人論です。通常は恩人となれば、つい美点ばかりの「聖人列伝」になりがちですが、大平のそれは恩人の欠点からはじまることも少なく

ありません。でも、読み進むうちに、それが「欠点の美」Ⅱ「聖人も人の子」であることを覚えてくれ共感を覚えます。しかもそれが許されるのは師弟間の強い信頼の絆があつてのことにも気付かされ、いささかの羨望を禁じ得ません。

なお、以上の大平語録とは別に、亡くなる直前の政局多難な折柄、稲田伊之助先生（小学校時代の恩師）に宛てた大平の最後の手紙物語で、故人を偲んでいただければ幸甚です。

前号に引き続きご高覧・ご高評の程、お願い申し上げます。

令和元年九月吉日

公益財団法人大平正芳記念財団

理事長 大平 知範

吉田さんと池田さん

『春風秋雨』（昭和41年10月）に所載。池田総理没後、池田政権が内外の諸問題にどのような座標をもって対処したかの回顧を中心に書かれた貴重な書。本編では身近に接したものでないならはの吉田さんと池田さんの魅力を語っている。『大平正芳回想録・資料編』『大平正芳全著作集』2巻（講談社）に収録。

一 大 磯

池田さんは静養先の箱根への行き帰り、よく大磯に吉田元総理を訪ねることを楽しみにしておられた。

行き帰り枝折戸を見て思うかな　しばし相見ぬあるじいかにと

は天皇陛下の吉田さんを偲ばれた御感懐であるが、吉田さんは、大磯の海岸で悠々自適の境涯にはいつておられる。

しかしこの閑居は、決してお粗末なものではない。北に小山を背負い、南は縹渺たる太平洋を抱えた豪壮な屋敷である。つい隣りまで故堤康次郎氏の所有地になってきたので、いつの日かこの屋敷も堤さんのものになりはしまいかと心配するむき（例えば高碕達之助氏）もあつたようであるが、逆に吉田さんは、その堤さん所有にかかる五賢堂さえも移転費付きでもらいうけ、自分の屋敷に移してしまわれた。五賢堂というのは維新の元勳伊藤博文、木戸孝允、岩倉具視、三条実美、西園寺公望の五賢人を祭つた小宇である。

わが国には海外から多くの賓客が訪れる。そしてその数は年を追つて多くなつてくる傾向が見られる。吉田さんは、その方々を必ずといっていいくらいにこのお屋敷に招待される。米国はもとより英独仏さらには中国といった具合に、吉田さんの客となられた要人は多い。吉田さんの客に対する応待ぶりは、その人柄が偲ばれて、全くユニークなものがある。天衣無縫（てんいぶふう）というか懇勤（こんきん）無礼（むれい）というか、聞く人を嘩然（かぜん）たらしめるに足るものであるが、聞く人にとつて一種の快い響きをもっている。この人の毒舌（どくぜつ）を楽しむ人も多い。これは、相對の世界から超絶（ちょうぜつ）した高い立場に立つ吉田さんによつてはじめて可能なことであるといえよう。

二 吉田さんの魅力

総理その他の要人の大磯訪問ということになると、世間では、それが何か政局に特別の影響や意味をもっているかのように取沙汰されるのが通例である。吉田さんという方は、政局を担当されていようがいまいが、代議士というバッジをつけられていようがいまいが、絶えずそのように問題になる人である。しかし私は、それら要人の大磯訪問を格別に意味があるものとは思っていない。恐らく訪問を受けられる吉田さん御自身も、何とも思われていないのではないかと思う。池田さんの大磯訪問も、先輩であり恩人である吉田さんに対する礼儀ということが先に立ち、吉田さんとのたわいもない会話にじみ出る人間的魅力にひきつけられてのことであつたと私には思われる。何んとなれば、池田さんは吉田さんを師表と仰ぎ、かけがえのない恩人として敬慕しておられるが、同時に、吉田さんが現実の政局の裸面にありてこられることを好まれず、またそういうことのないように終始こまかく配慮されておつたからである。

そのように吉田さんを迎えられることが、吉田さんを敬慕する後輩としての礼儀であり、日本の政治から院政的臭味をとり除く道であると池田さんは考えておられたようだ。日本の政

界で吉田さんほど高い水位に位しておられる人はなく、国民の心の奥に吉田さんほど深い敬意と信頼をかち得ている人はない。それだけにこの偉人が超然たる絶対の立場におられることが、日本の政界全体のために必要なことだと池田さんは心得ておられたようだ。現実の政局の平面に吉田さんがおられてこられるとなると、吉田さんは、否応なしに派閥という相対の世界に何等かの立場をとられるものと見られる破目になられる。それはよいことではない。代議士を引退されて、非公式ながら、宮中のことについてだけ、御相談にのっていただきたいと吉田さんに懇請されたのも、他ならぬ池田さんであった。

ところがこの池田さんの微衷を、当の吉田さんがどのように受けられているか、それは私にもよく判らない。なるほど吉田さんは池田さんの懇請を容れて、昭和三十八年の総選挙には立候補を断念された。また私などがお訪ねしても、現実の外交政策や外務省の人事に対し、自らの注文を出されるようなことは一切されなくなった。私なども冗談まじりに「あまり長居すると外務省の人事などについて脚注文がでると困りますから、この辺でお暇乞いをすることにいたします」と申上げると、吉田さんは呵々大笑されるのが常であった。吉田さんはよほど自制されているにちがいないと思われる。

しかしそれでは吉田さんは一切の俗事に超然としておられるかという点、必ずしもそうで

はない。天下の大事についてはもとよりであるが、友人知己から頼まれた些事についても、それを机の引出しにしまっておかれるようなことはなされない。自ら筆を執られて、池田さんはじめ要路の人々には、自分の所見や希望をよく書いてよこされたばかりでなく、自ら電話機をとって電話されることもまれではなかった。池田さんは「オジイサンからこういう書翰がとどいたよ」とか「オジイサンはこういわれておるよ」ということをよく洩らされたものである。池田さんによこされた吉田書翰は、大きいトランクの空間を満たすほどになつておるにちがいない。一体このことはどう解釈すべきものであらうか。

吉田さんという人は、義理と友情に篤い方である。かつて自分が指導を受け恩義をこうむつた先輩や友人に対してはもとより、その子女や孫のことまでも、常に案じておられる恩誼に篤い人である。また人から依頼されたことについては、細大となく、然るべき処理をされないと気がすまない律義な人でもある。そしてその心情が特定のことには触発されては書翰ともなり、電話ともなつてくるとしか思われない。それを受けた相手方がどのように受取るか、というような配慮や遠慮はされない。相手もまた自分と同様に恩に感じ義に篤い人として考えられておられるにちがいない。相手もまた自分と同様に、ハッキリと物事を割り切つて、是は是、否は否、好は好、嫌は嫌であると思つておられるのであらう。清明をもつて心を支

え、淡々をもつて情を抑え、勇断をもつて事に処す方である。「こういう事をいっては池田君が迷惑がるにちがいない」などという心遣いは、自分の第一義とする義と理の前には別して気にかけておられない方ではあるまいか。

ただ、池田さんはさきに述べたような配慮から、自分で進んで現実の政局の問題を吉田さんにもちかけるようなことのないよう終始心掛けておられたことは間違いない。また世にいう大磯会談というものが、政局問題にふれたこみ入ったものであったという評価も成りたないとは私に判断しておる。

吉田茂という大器を論評することがここにおける私の主題でもないし、私はその任でもない。ただ吉田、池田両氏の交渉というものを最近の政局問題に限ってみれば、私はこのように理解しておるといふことだけを述べるに止めておきたい。吉田茂の人物と業績を探究することは、日本の近代政治史にとつての大きい課題であるからだ。

吉田さんとチャーチル

『素顔の代議士』（昭和31年1月）に所載。戦後日本復興の立役者・吉田総理が石もて追われるような退陣劇―それを目の当たりにしての憂国の論。チャーチルの功績を称える同国野党党首の見識と対比させ、「人を責めるに急であつて、自らの非に鈍感な」この国の野党と一部マスコミの不見識を論難。3年目新人代議士大平は、早くも保守本流の王道を歩み始めていたことがうかがえる。『大平正芳全著作集』1巻（講談社）に収録。

昭和二十九年十月下旬。秋晴れに恵まれた羽田の空港には、政府の高官をはじめとして大勢の人々が秩序よく並んで、吉田首相の帰国を出迎えていた。間もなく日航機が大きい爆音と共に滑走路にすべり込んだ。タラップに降り立った吉田さんは、疲労の様子もなく血色のよい笑顔をほころばせつつ懐しの故国の土を踏まれた。どこからともなく「万歳」の嵐が湧いた。しかし顔又顔の歓迎者の群から、私は遂に一人の野党の領袖の顔をも発見することが

できなかつたのである。

思えば吉田さんの外遊ほど国内的に大きい抵抗を受けた外遊はなかつた。しかし戦争によつて他国に与えた有形無形の損害に対する慰藉と、戦後友邦から与えられた数々の援助に対する謝礼の旅に上ることが彼にとつては不動の悲願であつた。嵐のような反対にも彼は頑として屈従しなかつた。野党やジャーナリズムは彼の外遊土産について何かと論評を加えたが、彼は土産などというさもないことは微塵も考えないで、只管ひたすら祈りの心をこめてこの厳粛な国民的義務に参往したのである。

しかるにその吉田さんが帰国して懐しくも踏みしめた故国の土には、彼が期待したであらうような暖きぬくもりは一向に見られず、冷い逆風のみが吹きすさんでいた。反吉田勢力の結集は大きい潮流となつて渦巻いていた。

翌々日、政状報告のため大磯に赴いた池田幹事長に、吉田さんは引続き政権担当の可否について諮問された。池田さんは「おやりになるうと思えばやれないこともありませんが、最早御退陣の時期に来ているように思われます」と答えた。そこで吉田さんは自由党総裁を緒方副総理に譲り、首相の進退を党首脳に委ねて、引退の決意を固められ、愈々十二月七日六六年の永きに亘つた吉田内閣は、巨木の倒れ落ちるように政権の座から退いたのである。

一葉落ちて天下の秋を知るといふ。巨星地に墜ちて天地正に肅然たるの趣があつた。

欲のない人は強い。吉田さんには金銭欲がなかつた。在外加俸の乏しきを憂える外交官が、その退官と共に貧しからざる邸宅を東京に構える例が多い中に、吉田さんはその養家吉田家の財産を永い在外勤務の間に費消して省みなかつた。自由党の総裁を引受ける場合の唯一の条件は、一円の党費も心配できないといふことであつたと言ふ。

吉田さんには名譽欲がなかつた。私は彼が暮夜ひそかに頭門を叩いたといふことを聞いたことがない。外務大臣から総理へのコースは、彼自身にとつてはむしろ迷惑とさえ思われたことであらう。唯彼の一意報国の至誠のみが、この煩勞に克く耐えさせたことであらうと思ふ。

吉田さんは数十人の大臣を任免して権勢をほしいままにしたことを非議する向がある。日夜苦樂を共にした閣僚を罷免するが如きことは人情に篤い吉田さんの克く耐えるところではなかつた。しかし国のためといふ一念に徹した彼は、克くこれを敢行して閣内の弛緩、停滯、腐敗を未然に排除して、空前にして絶後とも言うべき内閣の永き生命力を生き抜かれたのである。若し吉田さんにして万一自分の身辺にやましいところがあるとすれば、かかる果斷な行動には到底出られなかつたにちがひあるまいし、内閣もそう永くは続かなかつたにち

がない。

「反動吉田内閣打倒」の看板を、性こりもなく六年間も掲げつづけた政党があつた。吉田さんをワンマンとののしり、独裁者らしい、遂には国賊のようにけなし続けた政客もあつた。しかし国のためという一念に徹して彼は、群犬巨象に吠える中であつて、泰然自若、その生命を国民の正当に示された総意に賭けて、民主政治の公義を守り抜かれたのである。

欲のない人は強い。金も欲しくない。名誉も望まない。命も惜しくない。その人は強い人であり始末に困る人である。吉田さんはそういう人である。強いて彼の欠点を求むれば、それは彼があまりにも強すぎ、あまりにも始末に困る人であることであらう。

その吉田さんが、十二月七日、遂に桂冠されて、政権の座を去られたのである。ちようどその頃、全国のニュース映画は英京ロンドンで開かれた老首相チャーチルの八十歳の誕生祝いの光景を報じていた。その席場には、野党たる労働党の党首アトリーから贈られたチャーチルの大きい肖像画が飾られてあつた。チャーチルはその画面に喜悅の瞳を注ぎつつ両手を大きく開いて、*"The remarkable example of modern arts"*と嘆賞して、与野党はもとより全国民からやんやの喝采をうけていた。それにひきかえ、東京では、六年に亘る政権の荷を下した老首相吉田茂を乗せた一台の自動車、石をもて追われるように、うすら寒い師走の街

を通りぬけて大磯に急いでいたのである。

ところがその吉田さんは、かかる仕打に一言の不満を吐露することもなく又自らの成せる偉業に一言の弁疏を試みることもなく悠悠自適の境涯をたのしまれている。しかもその吉田さんが去った東京には、人を責むるに急であつて、自らの非に鈍感な人々が、人心に阿おねる乱舞を続けているのである。

一体、日本の政界はこれでよいのであろうか。それとも私のこの嘆息は、私独りのたわごとなのであろうか。

吉田さんとユーモア

『私の履歴書』（昭和53年6月）に所載。同年1月1日～1月31日まで日経新聞に掲載。福田政権時代、自民党幹事長の多忙の中執筆された。大平は吉田茂―池田勇人に連なる保守本流の後継者として吉田、池田に関する記述が豊富。保守本流の政治的役割の文脈の中での証言とともに人物論も少なくない。本編は、院政的影響力を自ら退けた大磯隠棲後の吉田さんとのユーモアあふれるエピソードが興味深い。『大平正芳全著作品集』1巻（講談社）に収録。

池田さんは箱根の行き帰り、しばしば大磯で悠々自適されている吉田茂元首相を訪ねられた。私も、外相時代は足しげくお訪ねして、天衣無縫というか、屈託のない吉田さんのユーモアに富んだお話をうかがうのを楽しみにしていた。大磯の吉田邸には、内外の要人の往訪が多く、引退後も吉田さんは依然として、隠然たる政治的影響力をもっていた。

いつのころであったか、大磯の吉田邸の応接間が温室様に改装されて、熱帯植物がいつぱ

い繁っていた。私が「ずいぶん豪奢ですね」と申し上げると、「うん、おれはザイバツだからね。もつとも、ザイバツのザイという字は「罪」という字だがね」といわれて、呵々大笑されるのであった。私が見やげに果物を持参して、「召し上がって頂けるようなものではありませんが」と申し上げると、「いや、ゲンナマでも別に苦しくはないよ」といわれる吉田さんでもあった。

またある時、大磯のお屋敷のお隣まで堤康次郎氏の持ち物になったと承ったので、私が「このお屋敷も、やがて堤さんの持ち物になってしまいますよ」と申し上げると、「馬鹿をいな。あの『五賢堂』（明治の元勳をまつた祠）だって、俺は移転費つきで堤君から召し上げたんだよ。おれは堤君に負けはしないよ」と強情を張られたこともあった。（しかし結局、大磯の吉田邸はその後堤家の所有になった）

吉田さんは、それでも何かあると東京に出てこられた。ある社会福祉団体の会合で、秩父宮妃殿下とご同席された時のことであった。官房長官の私が挨拶に立ち、「吉田元総理は八十四歳のご高齢にもかかわらず、大変ご健勝で、本日もわざわざご出席頂いたことは、われわれにとって大きな悦びであり、光栄であります」と申し述べた。ところが、見る見るうちに吉田さんは不機嫌になり、控室に退かれてからも、私の方をふり向きもされない剣幕で

あった。そこで私が、おそろおそろその所以をお伺いすると、「池田内閣は数字にたけた内閣と聞いていたが、私の年齢を間違えるようなことでは、困ったものだ。私にとつて今の一年は、全くかけがえのない一年であるのに、平気でそれを間違えるというのは許せない」といわれるのであった。事実、吉田さんはそのとき八十三歳であられた。

そこで私は、「それは全く私の不注意で、弁解の余地もありません。しかし、昭和二十八年総選挙の時、貴方は私のところへ応援に来て下さったのは有難いが、肝心の候補者である私の名前を、何度も念を押したにもかかわらず、オオダイラ君と二度も間違えられたじゃありませんか。だから今回の私のあやまちは、あの時の貴方のそれと帳消しにして頂けませんか」と申し上げたところ、「ずるい奴だ。君は」といつて苦笑されてお仕舞いになった。吉田さんという人は、そんな人だった。

吉田さんは、とりわけ友誼と人情にあつい人であった。吉田さんから池田さんに宛てられた手紙は、トランクに一杯残っているが、公務にかかわるもの他は、古い友人知己や、その縁辺の人々に対する綿々たる心遣いをしたためられたものが多いようだ。

外務省には「Y項バージ」という伝説がある。それは、吉田さんにいらまれた人はうだつがあがらないということだろうが、私はそのことにいささか疑問をもっている。というのは、

こんな思いもあるからである。

私が外務大臣に在任中のことであつたが、ある人を次官に起用しようと思つて、池田総理の了解を求めたことがある。すると池田さんは、「この人物の起用については大磯に相談しないといけない。ちよつと待て」といわれるので、私は「それは困ります。ここでお決め願いたい。大磯には後日、私が報告に上がります」といつて、その通りにもらつた。閣議を了えて、私は大磯に吉田さんを訪ね、三時間もお話したかと思うが、吉田さんは遂に人事の問題には、お触れにならなかつた。やがて私が腰を上げて辞去しようとする時、「どうだ、夕食をとつて行かないか」とおっしゃるので、「折角ですが、今日はご遠慮いたします。ご馳走になつた後で、もし外務省の人事などについてご注文でも出されると困りますから」と申し上げると、吉田さんは、はじけるように明るく大笑されるのであつた。

池田さんと富士山

本編も『素顔の代議士』（昭和31年1月）の「人物鑑賞」に所載。大平の池田評は一見厳しそうだが、一読すれば、いつの間にか人間味あふれる日本一の富士の山の政治家像になっている。それにはそれだけ二人のあいだに親密さと信頼関係があつてのことが文中から読み取れる。『大平

正芳全著作集』1巻（講談社）に収録。

富士山という山は遠くから見れば気高く美しい山であるが、近くで見れば何の事はない地肌のきたない禿山である。私は池田さんに一番近いものの一人である。閨房の秘事以外は一切知っているといても過言ではない。池田さんは富士山のように偉大な政治家であるのかも知れないが、私の池田観は近すぎるのでどうもあまり気高く美しく見えないうらみがある。私が池田勇人論を書くことは、池田さんにとつては一番迷惑なことだと推測する。

自由党は不思議にも官僚出身の党員を多く抱えている。吉田をはじめとして池田、佐藤、増田、大橋、吉武、野田、橋本等吉田内閣の大臣の閲歴に恵まれた人々を始めとして、新し

いところでは青木、津島、岸、山崎、相川、迫水、その他多くの追放復活組を擁している。その中で池田さんは、たしかに異色ある存在である。今のところ一頭地を抜いている観がある。

池田さんは秀才であるかと言えば決して秀才ではない。五高から京大に進んだので、自らも赤切符の凡才コースを歩いたのだと言っている。それが故望月老の推薦で大蔵省入りをしたのだが、彼の同期（大正十四年組）にはキラ星の如く秀才がいて彼の栄進のコースは決して順調ではなく、どちらかと言えば出世がおくれた方であった。それが幸いしてか、トップを争って進んでいた連中（山際正道、植木康子郎等）が追放にかかったが、彼はそれを免れた。そして主税局長から大蔵次官という彼が予想だにしなかった栄職にありついたのである。唯彼の官僚生活の中で二つの特筆すべきことがある。第一に彼は二十数年にわたる官僚生活を通じて終始税務畑にいたことである。途中満州国からもらいがかかった時も断って行かなかった。大蔵次官になるまでは一心に税の仕事に没頭した。それも中央、地方を通じて企画と現場の両方の体験を積んだ。しかも普通の学士には税務の実際をおろそかにする通弊があるのに、彼は会社の課状を克明に勉強したり、税務署の調査簿をひっくりかえして仕事を覚えたりした。抽象的な観念論には一向に無頓着で、一途に具体的智識と技能を身につける

ことに精進した。この具体的の智識と技能が後年の池田さんの骨格の一つになっている。

もう一つは彼が宇都宮の税務署長の時に世界的に稀な皮膚病に罹り五六年というものは、かゆさと鬨いつつ病床に呻吟したことである。彼はこの鬨病を通して、何かしら偉大なものに対する信仰心と苦しみに耐える強い意志力を養うことができた。これが今日の池田さんを作る素材の一つになっている。

こういった事は、大抵の読者各位が或は御承知のことと思うが、それだけではまだわが池田さんがえがき尽くされてはいない。彼は鋭い直観力と強い連想力に恵まれている。意志力の強いのと併せて池田さんの魅力はそこにある。それは読書から来たつけ刃ではなく、自らの体験と構想から出たいわば手がたい職人的なものである。従つてそれは必ずしも客観性をもった正しいものばかりとはいえない。もとより誤りもないとはいえないし偏向もあり得ることである。しかしつけ焼き刃でないだけに彼の実践や主張はなかなか強い。池田さんはまた一面荒削りの人で、従つて結論が早く演出が粗野である。度重なる放言事件等も演出の巧拙の問題であると同時に、他面結論を急ぐ性癖の現われでもある。

ところが池田さんは粗野であり放胆であるばかりかと言えば決してそうではない。なかなか細心な一面があり、見栄坊の半面がある。世渡りが決して下手な方ではない。吉田さんの

絶対の信頼を勝ち得ている所以のものは勿論池田さんの強靱な実践力や義理がたさに負うものであるが、同時に吉田さんにアプローチするやり方は尋常の吉田詣でのアプレ政界人の比ではない。吉田さんという人は、あれでなかなか意地悪いとか妙にペコペコ御べつかを使ひこなすラスプーチン型を容れる人ではない。世間には「吉田側近」等という言葉が出来て隠然たる勢力を形成し吉田政権の黒幕でもあるかのように云いふらす人が多かつたが、吉田さんはそういう人のかいらい、になるような人では決してない。よく人物を鑑別するし、その鑑別があやまっておれば因縁に捉われないで突っ放すだけの強さをもった人である。六十人も七十人もの大臣を製造した人として余りよく言われてないが、私はむしろその人が内閣のためにならない国のためにならないとなれば、即座に罷免するという吉田さんの強さに敬服したい。情義は個人的であり大義は公のものであるからである。池田さんはその辺の呼吸をよく呑み込んでいたので、在来の吉田詣でのように見えすいたおべつかを吐かないというキメの細さを心得ている。

その池田さんが今では自由党の大きい柱になってしまったし、財政の危局が叫ばれると池田財政に郷愁をおぼえさせるだけの信用をうち立て、ひよつとすると池田内閣も政界の日程に組まれるかも知れない情勢である。幸運といえは幸運であり、よくやったといえはよくやっ

たといえる。

しかしながら、これからの日本をめぐる内外の情勢は決して生易しいものではない。もとより強い実践力のある政治家でなければこの危局を担当できるものではないが、しかしそれ許りではいけない。世渡り上手だという処生術だけでもいけない。滅私とか自虐とか、衆の憂に先んじて憂え、一身を挺して国難に当る底の人物でなければいけない。私は池田さんが大病から生命拾いをした当時の謙虚で無欲な心境に立還り、国難に身を投ずるといふ大きい飛躍と、つつましい精進を彼に希求して已まない。政治は人によつて具現されるものであるが、その生命は天与のものであるからである。

欠点の美——一つの池田勇人観

同じく『素顔の代議士』（昭和31年1月）の「人物鑑賞」に所載。昭和29年8月に執筆。「はしがき」で触れた「聖人列伝」に墮さない大平の「欠点の美」の人物評の代表作の一つ。前稿の論と同様の流儀で、池田総理の人間的魅力を余すところなく活写している。『大平正芳全著作集』1巻（講談社）に収録。

あるとき、私は敬慕している松永安左工門老御夫婦から、お茶の接待を受けた。それはちょうど日曜の朝のことで、場所は国会に程近い御馴染の八百善であった。招かれたものは池田勇人氏をはじめ政界人や財界人数名で何れも夫人同伴であった。

何故松永老がこのような催しを目論まれたかという点、それより前、松永老御夫妻が目出度い金婚のエージを迎えられたので、われわれが老夫婦の風雪の御労苦をねぎらうと同時に、それにあやかりたいという希望も手伝って、一夜ささやかな祝宴を張ったのであるが、今回の茶会にはそのお返しという意味が含まれていたようだ。

朝九時というのに、老夫婦はもとより招かれた一同は遅刻もしないで八百善に集った。間

もなく一同は草履をはいて未だ朝露がかわききらない庭石伝いに茶室に案内された。そこへ接待の介添役というので八百善の主人公が出て来て、出し物の花瓶や茶器や掛軸等の由来や因縁を説明された。大体茶器というものは古いものが珍重されると聞いていたが、御多聞に洩れず八百善の主人公がとり出した茶器は何でも鎌倉時代のものが多いようであつたし、松永老が態々小田原からもつてこられた茶器も随分古いものであつた。

ところが、どの茶器を見ても或は花瓶をとりあげて見ても、何れも不格好不齊一のものばかりで、焼きそこねたものとか塗りそこねたものが多い。中には一部かけたところをつくろつたものさえある。しかも、そのような謂わば「出来損ね」が無闇に珍重がられ且つ高価だといふのであるから面白い。

なるほど古ければ古いもの程高いというのは一面理に叶っている。そのものが生産された時の生産費が如何に僅少なものであつても、複利計算によつてその現価を算出してみると随分高いものになりかねないのである。他面また古いものほど所謂稀少価値をもっているから、高価であつても別に不思議はない筈である。それにしても古いものの中でも、わざわざ不恰好なものの許りが何故珍重されるかということは近代の価値観からは、にわかに出てこないのである。

八百善の主人公は、這般の消息をさりげもなく、「それは欠点の美というものですよ」と

いう。なるほどどうまいことを言ったものだ、とつくづく感じ入ったのである。

ところが欠点の美という言葉をじつとよく味ってみると、尽きせぬ興味が湧いてくる。大
体人間というもののほど完全でないもの、欠点の多いものはない。神様はよくも、このように
欠点の多い人間を、とりどりに創造したものだと驚くのである。しかも聖書によれば、神様
は人間を自己の姿に形どつて創造したとある。神様はつまり、その愛惜する唯一の子として
人間を創造されたのだ。如何ようにも創り方があつた筈なのにその無限の可能性の中から、
態々今日われわれがまのあたりに見るような姿に人間を創造されたのだから面白い。神様は
その唯一無二の傑作として人間を創造し、人間の歴史を創出されたわけだ。

それほど神様が目をかけている人間は、謂わば欠点だらけというわけである。しかし私は、どう
も神意の秘義が、この欠点の中に隠されているように思われてならない。もしも人間が、完全かま
たは完全に近く創られていたならば、一体この世の中はどんな姿になるであろうか。恐らくそれは
驚くほど退屈な世の中であるに違いない。第一、法律などというものは一切用事がなくなる。従つ
て裁判所や弁護士などというものが要らなくなる。また小説とか演藝等というものはその題材払底
で困ることになり、政治家も失業を余儀なくされる。世の中は火の消えたように退屈で、無聊むちようを凌
ぐのに困つてくる。土台、完全といい、円満具足というような言葉自体が消え去つてくる。倫理と

いうものがなくなるのである。人間はその技能を磨き、品性を陶冶する必要がなくなってくる。それでは全くたまつたものではない。欠点というものは、そのように歴史の原動力であるわけだ。

私は池田勇人氏とは永年、兄弟の間柄にある。従つて、池田さんの公私両面に亘る美点も欠点も知り尽しているといつても過言ではない。私が一口に池田さんを評すれば、彼は手のこんだ手練手管に縁の遠い善良で単純な性質の持主であるが、如何にも生硬で欠点だらけのバランスのとれない人間であるといえよう。その証拠に彼が何でもなく実行することが、世間ではドギツクとられたり、彼があたりまえのこととして言つてのけたことが放言になつたりする。仮に池田財政にしても池田放言にしても、それが池田さんでなくて他の誰かが同じことをやったり言ったりしたのであれば、世間ではそのように取上げなかつたであろう。ともかく池田さんはそれほど厄介な人間である。そしてそれは彼の美質に負うというよりも、より多く彼の欠点に負うところが多いといつて差支えあるまい。

その池田さんは、それにも拘らず、わが国の政界における異色ある存在になつてゐる。私は、池田さんという人物を、つくづく鑑賞してみ、尽きない興味を覚える。人間を思い、歴史を回想し、政治を考えるにつけても、欠点に象徴される神意の玄妙さに今更のように驚くと共に、池田さんの生涯にまるとわる神意のいたずらにも考えさせられることが多いのである。

秘書官の役得

『財界つれづれ草』（昭和28年10月）に所載。本書は昭和28年10月20日、大平の政界進出一周年を記念して出版された「大蔵省回顧録」といえる。津島蔵相、池田蔵相の秘書官修行を通じて政治家としての薰陶を受けた。特に池田総理との結びつきの際緯と緊密さを知る手立てとして貴重。「秘書官の役得論」Ⅱ「天下人への道論」としても見逃せない。

『素顔の代議士』、『大平正芳全著作集』1巻（講談社）に収録。

私は大蔵省在勤十六年半の間に、三度大蔵大臣の秘書官を勤めた。前後四年の秘書官生活であった。思えば、これは珍しいことである。私は元来、秘書官には不向な男である。私が秘書官を、しかも三度に亘って勤めるなどということを用意した人はなかつたろう。それが不思議な廻り合せで、そのようになってしまったのだから、世の中というものは面白い。私も自分の適する天職に、一生涯恵まれるというような幸運な人は稀有なことであろう。たわいもない運命のいたずらで、仕方なしに不似合の職業にありつくのが、人の世の常のように

思われる。

私の最初の秘書官修業は、小磯内閣の津島寿一蔵相の下においてであった。津島さんは、もともと私の同郷の先輩であり、且つ私を大蔵省に拾い上げて下さった恩人である。昭和十年、私が大学三年の時、偶々高文に合格したので、これから先、官界に投ずべきか実業界に進むべきかについて、時の大蔵次官（大臣は高橋是清翁だった）津島さんの垂示を仰いだところ、即座に大蔵省に入るように勧められた。それからというもの、終始薰陶を受けている間柄で、津島さんが入閣する場合に、その秘書官を勤めるといふことは、考えて見れば何の変哲もない当り前のことであるといえれば言えないことはない。それにしても、秘書官に向な私を起用しようとされたのだから余程の決心であられたことと思う。第二回目は終戦直後の東久邇内閣（ひがしくに）における同じく津島蔵相の再度の秘書官であり、第三回目は吉田内閣の池田蔵相のそれである。

池田さんの場合は、津島さんの場合とは若干事情が違ふ。池田さんは広島県出身であつて、同郷の先輩でもない。又同学の先輩では勿論ない。唯、大蔵省における上司であつたに過ぎないのである。ところが池田さんは、私が税務署長の頃から、どうしたものか、私に特別の親愛感をもつておられたように見受けられた。私が大蔵省において、次々とポストを変えて

行つたが、その節々に彼のこまやかな配慮があつたようである。そして不思議なことには、私が津島蔵相の秘書官になつたきつかけも、他ならぬ池田さんの配慮であつたということである。

昭和二十四年の五月下旬のことであつた。経済安定本部の公共事業課長であつた私は、偶々南九州地方を旅行していた。その途次私は鹿児島庁に重成知事を訪ね、岩崎谷別荘で知事と夕食を共にしていた時であつた。宴ユキ酬ナの頃、重成さんから一通の電報を渡されたのである。「キクンヲヒシヨカンニキヨウシタシ、イソギキキヨウセラレタシ、イケダ」というのであつた。全く予想もしなかつたことであつたので（事実もう秘書官でもあるまいと思ひ切つていた）、私は恩義と自負のあいだをあれやこれやと考えさせられて、その夜はまんじりともできなかつた。翌朝、池田蔵相宛に「ゴオンコシンシヤスルモ、ココロチヂニミダレテケツシンツカズ、キキヨウマデゴウヨヲオネガイス」と返電した。そうしておけば、大蔵省の同僚が何とか心配して、お役御免にしてくれるだろうという期待も手伝つて、ゆつくりと残りの旅程を歩いたのである。霧島から都城、宮崎、延岡を経て別府に辿り着き、そこで二日間ゆつくり湯につかつて、人目にたたないようにコツソリ帰京した。帰京後、声をかけて下さつた御挨拶のつもりで、大臣室に池田蔵相を訪ねた。そこで私は、「私を秘書官にという折角

の御所望ですが、大蔵部内にはより適任者が雲のようにおられます。私が最適任者を物色して推薦申し上げますから、私の起用だけは御勘弁願いたい」と申出た。笑って聞いていた池田蔵相は、「いや、もう一週間も前にちゃんと君を秘書官に発令してある。わしが大臣をやる以上、君が秘書官をやるのは当り前のことではないか。何もしなくてもよいから、じっと隣りの部屋で坐っていてくれたらそれでよいのだ」という口上であった。私は返す言葉もなく、それから秘書官室の主人となったのである。

秘書官のことを俗に「かばんもち」という。大臣のかばんをもつて随行するところから出た言葉であろう。一種の従者である。秀吉が信長についていた頃は、それを「ぞうりとり」と言っていたようである。大臣の側近には誰かこういう仕事をする別の人が要るわけだが、秘書官はそういう仕事をしよつちゅうしているわけではない。と言って大臣のかばんを全然もたないわけでもない。偶々そういう場面に出くわすこともあるのである。それも偶々の話である。更に秘書官は大臣とよく起居行動を共にしているので用心棒のようにも見える。勿論、大臣が凶変に遭えば、身を以て守り抜く用意がなければなるまい。しかし用心棒の本職は、ちゃんと警視庁から部長級の警官を「護衛」として派遣されている。してみれば秘書官の職能を「かばんもち」であるとか「用心棒」であるというのは、その実体にピッタリしな

い。そういう役目は、偶然のことであつて常にそうであるわけではない。

秘書官は、又大臣の補佐役であるといわれる。たしかに補佐役であるには違いない。大臣ともなれば、補佐役がなくて勤まるものでは勿論ない。必ず何人かの補佐役がある。大きく言えばその役所の人全部が大臣の補佐役と言えよう。特に次官とか各局長とかは、文字通り補佐の役目をやっている。何も秘書官に限つたことではない。それでは、秘書官の補佐と他の者の補佐とは一体どのように違ふのかということだが、そこらあたりに秘書官の本質を摘出する鍵がかくされているように思える。次官とか局長とかいうのは役所の仕組の一つの駒であつて、特定の大臣につきものではない。大臣が誰であつてもよいわけである。彼等の職務の規律は、誰が大臣であろうと、その所管の仕事の範囲について一生懸命に補佐の任に当るのが、彼等の義務であり責任でもある。大臣たる人によつて補佐の濃淡、軽重の差別があつてはならない。彼等と大臣とのつながりは、従つて制度的なつながりに他ならない。尤も人間のことだから、大臣の如何によつて好悪や親疎のあやは勿論あるにはある。特定の大臣が辞職すればこれに殉じようとする人もないではない。しかし常にそうあるべきであり、そうあらねばならぬという筋合のものではない。又彼等はその所管以外の仕事について大臣に意見を具申したり、その反省を求めたりすることもできないわけのものではない。しかし、そ

れも常道であり常則であるとは言えない。

ところが秘書官の補佐ということになると、別段所管の範囲が限られているわけではない。大臣の仕事の全面を覆う補佐である。時には私事にまで踏み込まなければならぬ場合もある。又どの大臣の秘書官でも勤まるという具合にもいかない。特定の大臣との個人的な人格的なつながりということが、大臣と秘書官との関係を支えている支柱であり基盤である。そこで自然両者の関係は運命的なつながりにまで発展してくる。それは大臣又は秘書官が、仮りにわれわれに限りそうではないと主観的にきめこんでいても、客観的にみる世間は、素直にそのように受取ってくれるものではない。大臣の黒星は秘書官の黒星であり、大臣の榮譽や名声は、大なり小なり秘書官のそれになってしまふ。その逆の場合もそうであるといえないことはない。そのように両者の関係は人格的、運命的なつながりであるから、大臣を辞めてしまえばこの関係が切断されるようなものではなく、それは一生涯のつながりになり、二世三世の縁ともなりかねないのである。「すまじきものは宮仕え」という言葉がある。これは公職にある者の責任の重さを嘆じた言葉であるが、普通の役人さえそうであるとすれば、秘書官のように、生涯の運命を決めてしまふような仕事には、滅多にたずさわるものではないと言えよう。

それにしても秘書官というものは随分役得があるだろうと思われる人があろう。確かに役得はある。大きい役得があるものである。先年私は、私淑せる安岡正篤先生と築地の灘万で夕食を共にしたことがある。その席上、私は安岡先生に、「貴方は東西古今の歴史に精通されていますが、一体貴方の眼識で、歴史上誰が一番偉い秘書官だったと思われませんか」と尋ねたところ、先生は即座に、「豊臣秀吉です。彼は織田信長の草履取りをしていたが、その間に信長の欠点を知り尽した。そして彼は用心深くその欠点を自ら履まないようにしたからこそ、天下を取ることができたわけです。いわば、秀吉は秘書官の役得を最大限度に享受したと言えましょう」と答えられた。さすがに名言であると言えよう。津島さんにしても池田さんにしても人間であるから相当の欠点をもっておられる。殊に池田さんの場合は欠点だらけといってよい程である。してみると私は相当大きい役得をいただいたものだと思う。役目柄、大勢の有名無名の名士と交りをもつことができ、その人達の人となりをつぶさに学ぶ機会を与えられると同時に、自分が仕える大臣の長所短所を、まのあたり吟味することができるといふことは、有難いことである。これを役得と言わずして何を役得と言うことができようか。私の秘書官生活は、二人の大臣の寛容と同僚秘書官に人物を恵れたお蔭で、何とか愉快にたのしむことができた。現在衆議員議員をしている黒金泰美、参議院議員をしている宮

沢喜一、それに大蔵省に孤塁を守っている稲田耕作（理財局貸金課長）の三君は私の同僚秘書官であり、秘書官として皆百二十点位の採点に値した篤実有能の士である。私に多少のマイナスがあっても、大過なくやって行けたのは全くこの三君のお蔭である。ここに改めて謝意を表したい。

池田勇人（1899年～1965年）

広島県豊田郡吉名村（現竹原市）生まれ。旧制五高（現熊本大学）・京都帝国大学を経て、1925（大正14）年大蔵省に入る。東京税務監督局徴税部長時代に大平を知る。1947（昭和22）年大蔵次官に就任。1949年の衆院選に広島2区から立候補当選、1年生議員でありながら吉田内閣大蔵大臣に抜擢される。1960年岸信介内閣総辞職後、首相となる。「所得倍増論」を掲げ、経済成長を演出。1965年8月13日死去。享年65。

大平は池田を「もともと非凡な英才ではなかった。機略縦横の政治家でもなかった。いわば、愛嬌に乏しい武骨な人であった。ともかくよく勉強する人であった。また善かれ悪かれ自分の信念で真直ぐぶつかってゆく人であった。」と評している。（大平正芳記念館の池田勇人氏コーナーのバネルより）

津島蔵相の思い出

『私の履歴書』（昭和53年6月）所載。津島寿一氏は大平を大蔵省に入省させた同郷の先輩。小磯内閣と東久邇内閣で津島蔵相の秘書官を二度勤めた。偉大な師であり恩人であった津島蔵相から受けたはかり知れない薫陶は、ここに描かれた2つのエピソードだけでも知ることが出来る。『大平正芳全著作集』1巻（講談社）に収録。

昭和二十年八月の終戦とともに、東久邇内閣が成立し、津島寿一氏が再び大蔵大臣として入閣して、私はまたその秘書官となった。七十二歳の母が郷里で死んだのは、これから二週間を経た月末であった。

終戦直後に成立した東久邇内閣は、連合軍による占領行政に移行するための接着剤的な存在で、きわめて短命でもあった。連合軍総司令部から、意表をついた命令が次々と出され、現状維持にかけた日本人の甘い夢は、つぎつぎと崩れていった。食糧難は日増しに深刻の度を加え、アメリカの援助が干天の慈雨のように渴望されていた。

九月のある日、津島蔵相から、マッカーサー元帥に会いたいので、終戦連絡部を通じて、アポイントメントをとるよう命ぜられた。やがて司令部から「応諾」の返事が届いたが、どうしたものか蔵相は、色をなして、このアポイントメントは断るよう言われるのであった。理由をきいてみると、「その日は日本の祭日である。日曜、祭日に面会のアポイントをすることは、大変失礼なことで、西洋の礼法では到底考えられないことだ。敗戦国とはいえ、私は天皇から親任された国務大臣である。したがってこの措置は、自分に対すると同様、日本国に対する非礼であると思うから、断るのだ」といわれるのである。

そこで私は、「お話は一応もつとも存じますが、断るべきではないと思います。何となれば、日米間にはまだ講和が成り立っていない、いわば戦争状態にあります。元帥は、占領軍司令官として戦場にあるようなもので、戦場には、日曜も祭日もないはず。お受けされるのが至当であると考えます」と答えた。

蔵相は不承不承、私の進言をいれて、第一生命ビルにあつた総司令部にマ元帥を訪ねられた。すると待ちかまえていたバンカー副官が、涼しい微笑を浮かべて大臣を迎え、「実は元帥は、きのうの午前十一時に貴大臣の来訪をお待ちになっておりました」というのであつた。見る見るうちに蔵相の顔色は朗らかになり、連絡の手違いによる非礼をわびられた。副官は、

蔵相をかかえるようにして元帥の部屋に導き入れ、元帥と蔵相は通訳ぬきで小一時間会談された。話題の中心は、当時困窮の極にあつた食糧問題の打開策に関するものであつたようだ。

やがて会談を終え、エレベーターを降り、お濠ばたで車上の人となつた蔵相は、大変ご機嫌がよかつた。そして元帥の副官バンカー大佐のつた立派な態度を、繰り返し称賛されるのであつた。しかし、お隣に座っている無骨な大平秘書官に対しては、ついに一言も慰労の言葉がなかつた。清澄な新涼を思わせる快晴の空を見上げながら、私は淡い嫉妬に似た感情を、バンカー大佐に感じたことを思い出している。

津島蔵相について、もう一つ鮮明に記憶していることがある。二十年十月、マッカーサー司令部が突如として、朝鮮銀行と台湾銀行の閉鎖命令を出した時のことである。司令部から指令を携行して帰つてきた式村義雄金融局長を迎えて、ただちに省議が開かれた。席上、蔵相はまず、同局長が司令部当局に何の留保もつけないで指令を持ち帰つたことを戒めて、次のようにいわれるのであつた。

「いま閉鎖されようとしている両銀行には、多くの預金者がいるはずだ。その中には寡婦もいれば孤児もいるに違いない。その人たちは、明日からの生活を考へて、今宵はまんじりともせず不安におののいていることだろう。自分であれば、預金者の身になり、閉鎖後の経

過措置を十分打ち合わせたうえでなければ帰らない。行政には、そうした厳しい責任感と温かい思いやりがなければならぬ」

蔵相の発言があたえた衝撃は強烈で、満場はまさに肅然たる空気となった。しかし、この一場の訓戒がきっかけとなって、山際次官（後の日銀総裁）、愛知文書課長（後の蔵相）以下の事務当局が、徹夜で作業に動き出し、その翌朝までに、当面の善後措置がまとめられたのであった。

津島蔵相は、麴町の私邸が戦災で焼失したので、当時、碑文谷の石川さんのお宅に仮住居されていた。山際次官と愛知文書課長が、善後措置をまとめた文書を用意して石川邸を訪ねられたのは、省議の翌朝末明のことであった。私が大臣に、その人達の来意を告げた時には、すでに津島蔵相は羽織袴の端然たる姿で机に向い、執務されているのであった。私には、あの時の強い感動がいまなお忘れられない。

津島寿一（1888年～1967年）

香川県阿野郡坂出村（現坂出市）生まれ。旧制丸亀中学、一高、東京帝大法科卒業後、大蔵省に入省。大蔵次官、日銀副総裁などを経て、1945年（昭和20年）2月小磯内閣で大蔵大臣に就任。終戦後の同年8月に東久邇宮内閣で再び大蔵大臣に就任。1953年（昭和28年）の第3回参議院議員選挙に自由党公認で全国区から立候補し初当選。第1次岸内閣改造内閣で防衛庁長官を務めた。

大平が進路の相談に行った時、「即座に大蔵省にこい」といい、大蔵省に入省させた話はよく知られている（『私の履歴書』）。大平は郷里のそして大蔵省の大先輩である津島を「後進の亀鑑として郷土の誇りとして、敬仰の念を禁じ得ない」と記している（『巨暮芥考』）。1967年（昭和42年）2月7日死去。享年79。（大平正芳記念館の津島寿一氏コーナーのパネルより）

大学生生活——橋ファミリーの情愛

『私の履歴書』（昭和53年6月）所載。東京商大（現・一橋大学）では先輩・友人に囲まれたファミリーの一員として受けた幸せに感謝の念を述べている。とりわけ加藤藤太郎氏は大平の郷里の旧制三豊中学（現・観音寺第一高校）と東京商大の先輩であり恩人。生涯、慈父のような公私に亘る支援を受けた。47頁に掲げた加藤翁の銅像のための「大平正芳撰文」を通じて加藤翁を偲んでいたければ幸甚です。『大平正芳全著作集』1巻（講談社）に収録。

私は大学二年のころから、吉永栄助君（一橋大学名誉教授、法博）や故富樫総一君（元労働事務次官）らと親しくなり、当時助手であった田上穰治先生や大平善梧先生を中心とする法律の研究会に加わることになった。おそらく卒業後は法律書に親しむことも少ないだろうから、在学中に多少は勉強しておくべきだと考えたからである。

そのうちに、仲間の者が高等試験をうけることになり、当時三年であった吉永君は、その

年に司法科に合格し、われわれ二年組は、翌年外交科に二人、行政科に数名それぞれ合格した。私は行政科を選んだが、それがはしくも卒業後、大蔵省に入る機縁になったのである。

富樫君は、われわれの仲間では、一番すぐれた法律的な頭脳の持ち主で、高等試験もきわめて上位で合格し、内務省に入った。その後彼は労働省に移り、労働事務次官を退いた後は、外郭団体の理事長をしていたが、昭和四十八年に不幸病死した。彼は学生時代から、労働法にとくに興味をもっていたが、その生涯を労働行政に捧げることができたことは、彼にとつて本懐だったにちがいない。ちなみに、彼はわが国における労働法の草分け、孫田秀春博士の女婿でもあった。吉永君は富樫君と同様、鋭い法律的頭脳の持ち主であるが、学校に残り、商法と経済法の講座を担当して、先年定年で退職した。

外務省に入った武野義治、小島太一両君は、それぞれ大使をつとめあげてすでに退官。鉄道省の紙田千鶴雄、農林省の岡本貞良両君も、もちろんとつとつに退官している。

一橋という大学は、近代日本、とくに実業界に、多くの人材を送り出した学校である。しかも、実業人の養成と同時に、政界、官界（とくに外交界）、学界、教育界、文壇等にも、多彩に人材を供給している特異な学校である。単科大学のこととて定員は少なく、量的にその勢力を誇ることはできないが、質的には相当高いものがあるといえよう。また、同窓の結

束はかたく、私はそのファミリーに仲間入りを許されたばかりに、どれだけ助かったかわかわらない。

明治四十三年の卒業者名簿の中に、加藤藤太郎氏の名がみえる。加藤さんは、私と同じ中学の第二回の卒業生（私は二十四回）で、今年九十歳であるが、きわめて健康であられる。一橋卒業後、王子製紙に入社され、終戦時は副社長であったが、たまたま連合軍総司令部の追放令にあい、王子を退かれた。その後、廃墟になっていた王子の神崎工場を再建し、上質紙のメーカーとして独特の声望をもつ「神崎製紙」を創立された方である。学生時代から、私はよく日比谷の三信ビルにあった王子製紙に加藤先輩を訪ね、学生県人会の寄付などをたびたびお願いし、いつも予期以上のご協力を受けたことを感謝をこめて思い出している。

私が結婚することになった時のことである。私はその報告のため加藤さんを訪ねたところ、「君は貧乏のようだが、結婚式の費用の少なくとも半分は、自分で支払うように」といわれて、ポケットから財布を出され、当時の金で八百円もの大金を、惜しみなく恵投していただいたことがある。その後私は政界に入り、十回も選挙を戦ったが、加藤さんはそのつど郷土に帰られ、自ら陣頭に立つてよく支援してくれている。

私の今日あるのは、もちろん多くの先輩友人の友情と支援に負うところであるが、とりわ

けこの加藤先輩をはじめ磯野長蔵、菅礼之助、本田弘敏、小泉幸久、高橋朝次郎、田中外次、松本正雄、宮崎一雄、近藤淳氏ら、同学の諸先輩の愛顧に負うところが大きい。そして、その方々（なかにはすでに鬼籍にある人もあるが）の後輩を思う情愛が、今日まで変わることなく脈々と続いていることは、何としてもありがたいことである。

加藤藤太郎（1887年～1987年）

1887（明治20）年香川県三豊郡桑山村（現三豊市豊中町）生まれ。三豊中学校（現観音寺一高）、東京高等商業学校（現一橋大学）卒業後、王子製紙に入社。戦後王子製紙はGHQの指示で財閥解体となり、1948（昭和23）年同社神崎工場の再建を託され、神崎製紙を創設。51年初めて従業員持株制度を導入。64年会長に就任、67年相談役に退いた。

大平は加藤について「小生今日あるも全く翁の愛顧と庇護に負うものなり」と語り、津島寿一と並び「大切な二人の恩人」と回想している。郷里・高商・大学の先輩である加藤に生涯敬慕の念を持ち続け、公私にわたり大平のよき理解者、恩人で、長男正樹を神崎製紙に預けるなど二人の信頼関係は厚かった。1968年財団法人加藤奨学財団を設立、顧問に就任。初代理事長に大平正芳が就任（大平正芳記念館の加藤藤太郎翁コーナーのパネルより）

加藤藤太郎翁寿像碑文

加藤藤太郎翁は父龜造氏母ヤス刀の長男として明治二十年十月二十八日香川県三豊郡桑山村大字岡本嶋村に生まる。桑山尋常小学校より本山高等小学校を経て草創期の県立三豊中学校（現観音寺第一高等学校）に入り視野を外に拓め心身を内に鍛へ明治三十九年三月卒業す。同年七月東京高等商業学校（現一橋大学）に入学し講義に侍つては東西の新知識を吸収し三豊宿舍に據つては珠玉の友情を培ひ明治四十三年七月卒業す。翁は素祖の念願を篤く両親に對する孝養と恩慕の情は生涯を通じて日々新たに且切々たるものあり。又恩師中井虎男先生からは學徳兩面にわたり許り知れざる感化を受け美しき師弟の交りは渝ることなく先生の全生涯に及び敬仰欽慕の情は益々厚徳の度を加ふ。一橋卒業と同時に翁は王子製紙株式会社に入社す。恰も日本産業勃興の機運に乗じ翁は益々學徳の度の建設と運営に挺身しその社運を北辺に開拓す。東京本社に転じてからは常に経営の中樞に参画し在職三十七年に及び昭和二十一年二月には同社取締役副社長に榮進す。その間翁は広く深く社内外の尊敬と信望を惹き、時に藤原銀次郎氏と高島菊次郎氏からは厚き知遇と信任を受け中島慶次氏その他の後進からは深き敬慕と信頼を寄せられ今尚高王子系列企業の本鎮たり。大正八年五月翁は高子夫人を娶り三男一女を季け一門悉く清福の家慶を営む。偶々昭和二十一年十二月占領軍に依る経済力の集中排除の指令に接するや直ちに王子製紙副社長を退任す。しかるに天は翁に開日を与へず程なく廢墟と化したる同社神崎工場を復興し神崎製紙株式会社を創立す。廣瀬藤四郎氏遠藤福雄氏をはじめ五十名の同志と協力し灰燼瓦礫の中から發足して克く戦後の混沌と困難を克服し昔々その信用と實績を固む。昭和三十四年には徳島県阿南市に新鋭総合主力工場を建設し業界に揺るごとく地歩を確立す。畏とあたりより翁の産業界に致せる功勞を嘉して再度授賞の沙汰あり。宜なる哉。翁は又愛情と私財を惜しむところなく郷光のために愚投しその剛放挙に服せし。小生の今日あるも全く翁の愛顧と庇護に負ふものなり。就中神崎製紙の社長退社を記念し翁は全退職慰勞金を授けて加藤獎學財団を設立す。斯くて多くの有為なる人材は埋没を免れその能力の開発と發揚の機会を与へられその恩沢は永く家財を潤すこととなり。しかるに翁は自ら功名を希ひ富貴を求めず専ら清遠簡素の生活を甘んじ只管他者のために餅り社会のために尽して尚足らずとす。為して待まらず功成りて居らずの淡々たる心地に悠々自適す。正に後進の仰ぐべき道標にしてその人格の光は七宝の華々と共に永久にこの地に留まり後世の惠澤たるべし。今四歸未嘗雲會が豊中町の揚發を得て翁の徳業顕彰の像を建立す。翁不滅の行藏は仰げば弥々高く揺れば益々深きを覺え茲に記して以て鎮仰と感謝の微衷を捧ぐる所以なり。

昭和四十六年五月上 流

久平 二 芳 撰

生誕地（豊中町）近くにある銅像の碑文

大学生活——忘れ得ぬ恩師たち

同じく『私の履歴書』（昭和53年6月）に所載。東京商大（現・一橋大）では、学ぶ喜びを知りその知を育んでいった。とりわけ、ゼミナールの指導教授・上田辰之助先生からは深い薫陶を受けた。本文には「私は先生から、きびしいしごきを通して言葉を大切にすることを教えられた」とある。『大平正芳全著作集』1巻（講談社）に収録。

一橋はすでに、都心の神田から国立くにたちに、予科は石神井から小平に移転していた。そのころの武蔵野には、国木田独歩の作品にみるようなおもかげが、なお色濃く残っており、武蔵野と「商科大学」との組み合わせには、ややちぐはぐなものがあった。

講義の半ばで、芋掘りに出かけたことも再三であったし、秋から冬にかけては、落葉の散りしきるキャンパスの周辺は、ことのほか寂しかった。それに、映画をみるには新宿まで出かけなければならなかったし、古本をあさるには神田へ行かねばならず、ボートをこぐには隅田川というふうには、往復の電車賃さえとばしい学生のふところには、相当こたえたもの

である。

一年のときのプロゼミナールでは、経済地理と商品学を講じておられた故佐藤弘教授の下で、「自然と人間の交互作用」をテーマに勉強した。先生は教授というよりは、珍しく多趣味な友人として、われわれとよく遊んでくれた。三井アルミの川口社長との友情は、このプロゼミにおける交友の産物である。

必修課目のほか、私は杉村広蔵先生の経済哲学、山内得立先生の哲学史、三浦新七先生の文明史、牧野英一先生の法律思想史など、手当たり次第に、欲張って受講することにした。私にとっては、いずれもが難解であったが、受講したおかげで、思想史、とりわけ経済の思想史に若干の興味を覚えるようになった。二年になってからの本ゼミナールを、上田辰之助先生にお願いすることにした背景には、そういういきさつもあったのである。

上田先生、経済学者というよりも、むしろ社会学者であり、社会学者である前に実のところ言語学者であられた。したがって、先生のトマス・アクィナスの研究その他のお仕事も、その言語学的な素養を抜きにしては考えられないものであった。

ゼミナールは、たいてい吉祥寺の先生のお宅で行われた。R・H・トニーの『獲得社会』をテキストとして、彼の経済思想をというよりは、トニーの英文自体の言語社会学的な解

明を教わった。名古屋大学の北川教授も、たまたま内地留学の形で上田先生に師事しておられ、われわれのゼミナールに参加されていた。私は先生から、きびしいしごきを通して言葉を大切にすることを教えられた。一橋の図書館に、わが国における商業英語の鼻祖ブロックホイス先生の胸像があるが、その下に刻まれた献辞が、上田先生のものされた英文であることを知る人は意外に少ない。この文章は、ブロックホイス先生の貢献と、一橋の学校としての使命を簡潔に記したものである。

"His was a mighty workshop in which he devoted his life to the training and equipment of the men who won for Japan autonomy and distinction in her commerce with the world."

故杉村広蔵先生は、当時助教教授になつたばかりの新進気鋭の学者で、左右田喜一郎門下の逸材であつた。杉村学説は、要するに経済は手段価値にとどまるものではなく、独自の価値領域を形成すべきものでなければならぬことを、思想的に論証したものといえよう。

われわれは、生涯の大半を経済的な実践に投じて悔いるところはない。その中でわれわれは、仕事三昧の境地を味わい、人格の充実を覚えている。その世界が、他の目的に奉仕する手段にすぎないものとするのは、われわれにとって我慢できることではない。新しい倫理の世界は、経済社会のうちに根底をもつべきであり、経済における、経済のために、経済を

通じて生れた道義でなくては社会の全体文化に妥当する道義とはなり得ない、というのである。

先生の短かった生涯は、いわば経済的文化価値の究明に捧げられたものといえよう。先生は天才肌の学究であつたが、その学位論文「経済社会の価値論的研究」が、はしなくも「白票事件」（昭和十年九月、論文審査の教授会で賛否不明の白票が投じられたのに対し、大学の学問精神の沈滞を意味するとして、杉村助教教授が職を辞して抗議した事件）となつて発展し、学の内外で大きい問題となつた。先生は退職後、上海の商工会議所などで大陸の経済を研究されていたが、終戦後間もなく他界された。ともあれ、先生の存在とその講義は、われわれにはたまらない魅力であり、天がこの天才を鬼界に回収することをなぜ急いだのか、何としても惜しまれてならない。

中山伊知郎助教も、杉村先生と並んで学生の間の人気があつた。恩師シュンペーターの流れを汲む新進の学究で、われわれは先生から経済原論の講義をきくことができた。やがてその内容は、「常に変動する経済現象を観察する時、最も特質的なことはその相互の依存関係であり、経済理論の基本部分は、均衡理論のあらゆる形態からなるものであるから、経済学とは均衡理論で貫かれた一体系である」（岩波全書）という立場をとられ、それが純粹経

済学として結実したのである。

国立に一橋キリスト教青年会の寮がある。この寮は、一橋のYMCAの同志が、その先輩の寄捨を仰いで建てた学生寮であり、毎日曜日、礼拝がもたれていた。私はこの寮に入寮はしなかったが、この建設のため趣意書をもって、関東、関西各地の諸先輩を歴訪行脚したものである。幸いに一万五千円程度の醸金の確保に成功し、国立の木立ちの中に二階建の寮ができて、大堀さんという親切な信心深い寮母さんを迎えることができた。大堀さんは今日もなお御元気で、時折、玉章を頂いているのはうれしいことである。

上田辰之助（1892年～1956年）

東京日本橋生まれ。東京府立第一中学校（現都立日比谷高校）を経て、1914年東京高等商業学校（現一橋大学）を卒業。1920年から東京商科大学附属商業専門部教授。米英仏留学を経て、1922年に帰国。東京商科大学講師、助教を経て、1931年教授。トマス・アクィナス研究などで知られる。1956年10月13日死去。

大平は師を「経済学者というよりも、むしろ社会学者であり、社会学者である前に実のところ言語学者であられた。私は先生から、きびしいしごきを通して言葉を大切にすることを教えられた」と記している（大平正芳記念館の上田辰之助先生コーナーのパネルより）

中井虎男先生と三豊の天地

大平の還暦記念に上梓された『旦暮芥考』（昭和45年8月）に所載。昭和44年10月12日の弔辞。中井虎男先生は旧制中学時代の人格形成に最も影響を与えた恩師で、導師であるとも述べている。本文の「三豊」の地とは、香川県（讃岐）の西部地区（西讃）を指し、観音寺市（大平の生誕地・豊浜町）と三豊市がある。『大平正芳全集著作集』3巻（講談社）に収録。

時正に中秋。天地愈々寂静、万象愁く清澄、人各々深い反省と思索に沈潜する時、先生は、九十年を超越る偉大な生涯を、静かに閉じられました。それは先生らしい大往生であり、偉大な終焉でありました。その日、偶々私は大野原小学校において、国会報告演説会を開いておりました。私の挨拶は、はしなくも先生に対する追悼の辞で始まり、欽慕の言葉で結ばれることになったのであります。

先生の一生は、南に雲辺寺山を頂点とする阿讃の山並を仰ぎ、西に白く光る燧洋を見下ろす三豊の天地に終始されました。先生は広く深く三豊の自然を愛しいつくしまれました。ま

た凡そ三豊に生を享けた人は、悉く先生の慈顔と温容を仰ぎ、先生の学徳と高風に接する俸せをもつことができたのであります。

人呼んで先生を「三豊聖人」という、むべなる哉であります。先生はその貴い生涯を学理の探究と旧制三豊中学（現観音寺一高）を媒体としての子弟と郷党の教育に傾倒されました。先生はみづからが天才的な数学者であり、従つて先生の門下よりは、矢野健太郎教授をはじめ数多くの優れた数学者を輩出しております。数学はすべての学問と人間の一切の営みの基礎をなすものであります。先生の門下生が、その学問とその事業を通じて、先生から享けた数学的な解明力と構想力によつて、いかに裨益したかは計り知れないものがあります。先生は、また終戦直後の混乱期に、推されて大野原の町政を預けられたことがありました。常任坐臥、公平と無私を旨とされ、事の中にありて事を解明され、事の外に在りて事に処され、人々の信望と敬愛を集められたのであります。

ここ数年來、先生は病床にふせられ勝ちでありました。そのお姿は正に消えようとするともしびのかほそい点滅にも似たものがありました。しかし先生は、その間にあつても、日夜遡ることなく数理の世界や人生の哲理に深く沈潜され、或いは詩句や日本画を通して芸術の林をも丹念に逍遙されておりました。また病床にありながらも朝夕子弟を思い世を憂えられ

た、静かな充実した神々しい日常でありました。かくて先生の存在は、われわれ子弟と郷党を導く巨星であり、反省と激励のつきぬ泉であられたのであります。

先生は数学者でありましたが、またそれ以上に教育者でありました。先生は子弟と郷党に父のような犯し難い威厳と、母のような限りないつくしみを以て接せられました。先生は自分の倅せよりも人の倅せをこい願われました。人の悦びをそのまま自分の悦びとしてかみしめられました。更に先生には富や地位を求められる俗念は全くなく、その永い生涯を専ら枯淡と清貧の境に終始されました。有限の成功をみずからに求められることなく、只管無形にして無限の成功を子弟と郷党の中に追求されました。真の偉人とはかくの如き方であるということができます。

十月十二日未明、先生はこの世において為すべき一切の事を成し遂げられ、みずからのすべてを子弟と郷党に与え尽され、ともしびの消えるが如く、静かに歸幽されました。先生の人生は更に加算すべき何もものもなく、更に除算すべき何もものもない傑作の人生であり、その終焉もまた神々しく且つ完璧でありました。

三豊は、今日、その道義と学問、人格と成功をその根本において大きく支えてくれた巨人を失いました。三豊の人々はもとより、三豊の山野における一木一草に至るまでが、先生の

長逝を悼み、その遺徳を欽慕したのであります。先生の有限の生は十月十二日を以て終止いたしました。先生が残された無限の生命は、とこしえにわが三豊の道標として、いよいよその精彩を発揮し、われわれ後進を導き励ましてくださることを確信いたします。

言葉は尽きないものがありますが、ここに欽慕の至情をしたため、在天の英霊が涼しい微笑を以てこれを享けられることを祈つて已みません。

中井虎男（1878～1969）

香川県三豊郡大野原村（現観音寺市）生まれ。香川県尋常中学校丸亀分校卒業後、東京物理学校（現在の東京理科大学）に進学。1904（明治37）年旧制香川県立三豊中学校に数学の教諭として赴任、以後30年間勤める。1935年から45年まで大野原村長。1969（昭和44）年10月12日死去。享年91。

大平は師を「人呼んで『三豊聖人』という、むべなる哉」といい、中井は大平を「まったく努力奮闘の人で生まれた才能を丹念にみがき上げて、遂に現在の大政治家としての素養」を築き上げ、「彼の今日の大をなしたのはまったく彼の誠実さと努力のたまもの」であり、「彼の倦むことを知らない努力は遂に底光りする人物にみがきあげられました」と記している。（大平正芳記念館の中井虎男先生コーナーのパネルより）

大平総理の最後の手紙―没後20年ぶりに発見 鈴木岩男

『燧』（観音寺第一高校同窓会誌・平成12年10月号）に所載。大平の最後の手紙2通は、大平の故郷・和田小学校の同窓で恩師でもある稲田伊之助先生に宛てた手紙。没後20年ぶりに大平の旧制中学の母校（観音寺第一高校）の後輩・稲田直樹氏（伊之助先生の長男）により財団にもたらされた。執筆は弊財団顧問で大平の高校・大学の後輩でもある鈴木岩男氏。

はじめに

母校の大先輩、大平元総理が逝去されてもう二十年になります。生誕九十年、大平正芳記念財団の設立十五周年でもあります。奇しくもその節目の年に、実に二十年ぶりに大平財団に届けられた大平総理の恩師宛ての二通の手紙の物語を紹介させていただきます。あの壮絶ともいえるべき逝去の直前に書かれた書簡に見る母校の大先輩の恩師へ人間としての律儀さ・誠実さに触れ、そのご遺徳を偲び学ぶよすがになればと思ひ筆をとりました。

大平総理から恩師・稲田伊之助先生に届いた逝去直前の二通の手紙

まず、別掲（74～75頁）の大平総理の二通の書簡をお読みください。その宛名の主は大平総理と同郷の和田村（現・観音寺市）ご出身の稲田伊之助先生です。稲田先生は、大平総理にとつて、和田小学校の先輩でもあり恩師でもありました。その稲田先生がご自身の生い立ちの記ともいふべき随筆集『あした葉』を昭和五十五年の四月十八日に刊行されました。実は、この二通の書簡は、稲田先生がその著書を早速に大平総理に寄贈された際のお礼状と、その中で約束されていた本の読後感を二旬後に書き送った手紙だったのです。

ここで注目頂きたいのは、この二通の手紙の日付です。それは、大平総理が亡くなられた昭和五十五年六月十二日のまさに直前ともいふべき四月二十八日（米・墨・加首脳訪問の2日前）と五月二十日（あの不毛な不信任案可決の翌日早朝！）になっています。つまり、この二通の書簡は、二十年前のあの突然のご逝去の直前、それは大平総理にとつて多忙の極みと苦渋に満ちた時期に当たっています。いわば人生最大の危機的な試練の真つ最中に、恩師のためにこれほどまでに律儀に心情溢れる書簡をしるされた、そのご誠意の重みと迫力に唯ただ圧倒されるばかりです。

そこに見る大平総理の人間としての誠実さと恩師に対する崇敬の念の深甚さに、言いようのない感動をおぼえるのはこの私だけではないと思います。

書簡に見る人間大平の誠実さに感銘した人々

その意味では、この二通の手紙に最も強い感銘を受けられたのは、勿論、手紙の受け取りの主の稲田先生ご自身です。稲田先生がその時のお気持ちを披瀝された文章が残されています。先生が当時在職されていた名門・市川学園高校の『市川学園新聞』に掲載されたものです。この二通の手紙に同様に感激された学校長古賀先生の勧めで、同学園新聞の出版委員会の生徒達の手で「大平首相の書簡について」という特別号が発行されました。大平総理の二通の書簡と並んで掲載（76頁）させていただきましたのでお目通しください。大平総理が第二信で、本の読後感として「用語が平易、表現が簡明。これこそが正に達人だと感嘆の思いで一杯です」と賞賛された稲田先生の手になる文章です。日本の政治家の中でも有数の名文家として知られた大平総理の書簡とのその名文家に賞賛された達人の文章を一緒に並べて読むことの僥倖に浸りつつ、師弟の交わりのあり様とその書簡の書かれた決定的瞬間のドラマ、

この「時空」両面の文脈の中で双方を読むとき、その感動はより深くなるかのようです。

現に、この感動を稲田先生と共有した人々のなかに、前述の同校の学校長がおられました。そして、その学校長の勧めにより同学園新聞特別号を編集した高校生とその学園新聞を読んだ多くの学生達がいきました。編集委員の高校生は、その感動を編集後記の中で次のように書き残しています。

——我々出版委員会は、学校長の勧めもあり、ここに「大平首相の書簡について」の特別号を刊行することになった。政治的にも多忙な時期にあたり（中略）恩師稲田先生にあてた手紙は、我々生徒にとつても、先生との関係を改めて考えさせられるものがある。故大平首相にとつて、稲田先生は六十年前の恩師にあたる。その恩師にあてた一字一句に、心あたたまる師弟関係をみる事ができよう——

人間としての誠実さの中に今日の教育問題への処方箋の一つを見る

若く多感な高校生にもこれほど素直な感動を与えた大平総理の書簡に対し更なる感銘を覚

える一方、教育の危機が取り沙汰されている今日この頃、彼等に感動を与えた人間・大平の誠実さの中に教育問題に対する処方箋の一つを見る思いがします。

因みに、大平総理は、教育問題について、次のように発言されています。「いま時の若者は……という大人の嘆きは、エジプトのピラミッド時代の石碑にもかかっている」「人間の歴史には、いつの時代をとってみても、今日と較べて、ひどくよかったという時代はなかった」「今日は悪い時代であるとい概にきめてかからないことが肝心である」「(大人はいま時の若者を嘆きそれは政治が悪いからだと言うが)政治で人づくりをしようなどは、軽々に言えることではない。いまの若者をみて感じるのは、私どもの若い頃より、しっかりしている。勇気があり、率直で、主張するところは主張する……つまりそんなに軌道は外れてないで伸び伸びとやっている」「(むしろ問題は、政治家も含めて国民の一人一人が)他を責める前に、まず家庭のこと、友人のこと、地域社会のこと、国家のこと、つまり自分より他者のことをまず頭において考えたり行動したりすることである」「人の本当の喜びは、他者を責めることにあるのではなく、他者のために何を奉仕するかにある」(『在素知贅―大平正芳発言集』大平財団刊行)。われわれ大人が、志(こころざし)を高く持ち、人のため・世のため・国のために懸命に生きる姿を子供達に見せることなくして日本の教育問題は解決しないと仰つ

ているのです。今回の二通の書簡の物語は、はからずも我々にその教えを思い出させてくれます。あのようにな変な時にも恩師に礼を尽くす誠実さを忘れない。というより、誠意が本当に身についたご人徳というか、むしろ人格そのものとして備わっている。この点こそが若い高校生心の琴線に触れたところであり、先程、「大平総理の人間としての誠実さの中に今日の教育の危機問題への処方箋の一つを見る思いがする」と述べた所以です。

憲政の大義に命を捧げられた大平総理

それにしても、遂には大平総理のお命まで奪ったあの時の政局の争点とは一体何だったの



「大平首相の書簡について」

市川学園新聞特別号（昭和55年3月20日号）

でしょうか？ 少し本題から逸れますが、簡単に私見を述べさせていただきます。

硯 侑太郎氏は、「大平首相を惜しむ」(『石油経済ジャーナル』)の中で、「大平は首相の座についてからは、新聞と党内の反主流派にいじめ抜かれたまま死んだといつてよい。首相の座につく前は、敬虔なまでに党首と党に尽くし、それは奉仕というよりも自己犠牲に近かった。それにもかかわらず自分が党首となり首相になつては、その奉仕を仇で返され、さぞあの世で恨みを呑んでいるだろうと思う。とまれ！幼時の貧乏や最愛の長男正樹の不治の病(ベーチェット氏病)で死別しても、人生の苦勞とせず甘んじて恕した性格からみて、恨んではないかもしれないが、残れし者にとつて、後味の悪いことには違いない」と悲憤慷慨されています。これを読んで、私などは、「よくぞ言ってくれた！」と大いに溜飲がさがる思いですが、それほど、あの当時の不信任案可決は、国益を忘れ憲政の常道を踏み外した、ひたすらに権力に妄執した某元総理(2名)等の反主流派の恥ずべき暴挙でした。彼等が言い掛かりに言い募っていた「大平総理が政権に連綿としがみついた」などというものでは決してありません。反主流派の行為は、離党してならまだしも党にとどまったまま野党と手を組んだのです。野合ともいふべき禁手であり、神聖な国会の場で私利私欲の権謀術数を演じたという意味で憲政史上に最大の汚点を残したものの一つです。

本来的には争いを好まない大平総理でしたが、一方では国の大義のためには一命を惜しまない数少ない肝の据わった政治家でもありました。この暴挙には敢えて戦うことを厭わず、敢然と国会の解散を決意されました。総選挙でその争点の是非を国民に問われたのです。そして遂には自らの命と引きかえに憲政（民主主義）の大義を守られたのです。

当時の自民党の圧勝を、大平総理の総選挙中の壮絶な死に対する同情票だとする俗説がいまだに信じられているようですが、愚かなことです。あの地滑りの勝利は、憲政の大義のために命を捧げた大平総理に対する国民の共感だったのです。当時の愚かな反主流派よりはるかに賢明な国民の選択だったのです。一般の総選挙で自民党が小淵総理の急逝を柳の下の一匹目の泥鰌よろしく同情票に利用しようとして惨敗したのは、大変申し訳ないことですが、現自民党幹部の不勉強・怠慢によるところ大だったと心底思います。この憲政の大義に生き残った偉大な先輩の経倫と自己犠牲の精神から何ら学ぶことをせず、そしてまた、その時の賢明な国民の選択の意味するところを謙虚に受け止めることを怠ってきたことへの当然の報いだったのです。賢明な国民の痛棒だったのです。

稲田伊之助先生のこと

話を本題に戻します。右の学園新聞の特集記事に目を通して次に感じることは、学生たちの感動の由来の今ひとつの要素が稲田先生の人格者としての教師像にあったということだと思います。そこで、稲田先生の著書とその記事をもとに、そのご略歴と大平総理との出会いのエピソードについて簡単にご紹介申し上げます。

明治三十六年四月、和田村字長谷に、川崎忠治・リヨの第八子として誕生。明治四十三年四月和田小学校に入学。わが母校の先輩としては、故佐野増彦氏（三中・20回卒）が同級で、以来九十年に亘り終生変わらぬ友情を分かち合った。大平総理は、すでに述べたように六年後輩だった。同校高等科卒業後、兄弟の多い環境もあり進学をあきらめ、家業の農業の手伝い、大阪の鉄工所勤務、帰郷して大地主今井家の手代修業などで家計を助ける。その間、学問への夢たちがたく、通信教育により大正十一年小学校准教員免許状を取得。初任地は母校の和田小学校。新任教師は、講堂にゴザを敷いてすわっていた生徒の前であいさつをするが、「その時、高等科一年生だった大平正芳君もゴザにすわっていた一人だ。どんな目で壇上の私を仰ぎ見たのだろうか」（『あした葉』）とある。

その後も小学校准教員を続けながら上級の検定試験を目指した。十九歳で小学校本科正教員、大正十五年、二十三歳で遂に難関の文検（師範学校、中学校、高等女学校の教員の資格検定試験）に合格。近隣町村の人々にとっては大ニュースであった。ただちに請われて、香川県立大川中学校（現三本松高校）教諭となる。その赴任の際、豊浜駅のプラットホームで大勢の教え子の見送りを受けたあと「汽車はホームを離れた。やれやれと私は腰をおろした。と、コトコトと靴の音をさせて、一人の中学生が近づいてきた。『先生、おめでとうございます』と丁寧にあやめながら帽子をとった。太平正芳君である。香川県立三豊中学校の制服を着、ゲートルを巻いている。帽子には白線を四筋巻いている。四年生のしるしである。観音寺駅で彼は下車し、一人になった私は、これからの自分の仕事、中学生を教える誇らしさと怖さを考えながら高松へ向かった」（同上）。その後も、文検合格に甘んずることなく、更に上を目指した。そのための勉強に便利な土地ということで、昭和三年、結婚と同時に（養子縁組で稲田姓に）四国を離れて、大阪府立岸和田高等女学校に転勤。同五年、漢文科の検定も受験、国漢両科の資格を得た。その上で、いよいよ検定試験の最高峰である高等学校（旧制）国語科教員の検定試験に挑戦。昭和八年に合格。三十歳だった。

昭和十年、四国にもどり、愛媛県立西条中学校国語科主任、同十八年、川之江高等女学校

教頭。同二十五年、丸亀高等学校教頭を務め、同三十三年、同校を定年退職。翌三十四年、千葉県市川市に移り、私立市川学園高等学校で教鞭をとる。

昭和五十八年三月、同校を退職の後は、念願であった読書三昧、長年続けてきた幸田露伴の研究に励むなど、悠々自適の日々を送る。

平成十一年八月、老衰のため逝去。享年九十六歳。

立志立行（幸田露伴のことば）の教育者像

―教員検定試験全コース征服の偉業―

以上のご経歴からもお分かりのように、稲田伊之助先生は、旧制中学・女学校、新制高校の教育界では、郷里の四国ばかりでなく全国的に立志伝中の教育者としてご令名高く、人格者として広く敬慕された先生です。和田村のご出身で大平総理と同じ小学校ですと首席を通されたことからすれば、本来なら、わが三豊中学を卒業され、一流の旧制高校・大学もしくは高等師範学校のエリート・コースを辿られた筈です。わが母校の先輩に稲田先生ありと誇らしく語られる筈でした。それがご家庭の事情で叶わなかったのですが、先生の凄さは、

働きながら検定資格試験の全コースを突破され、中・高・大学コースで得られる以上の学問的実力と人格的陶冶を達成されたことです。

因みに、戦前の教員検定試験には尋常小学校准教員検定、同正教員検定（尋正）、中等教員検定（文検）、高等教員検定と、五つのコースがありました。通常、いわゆる文検に合格すること自体が至難の業と見られていました。独学で高等師範学校卒と同じ資格をとるので、それだけで大変な成功物語でした。しかし、稲田先生にとっては、その合格は単なる通過点でしかなかったのです。稲田先生は、幸田露伴の本の題でもある「立志立行」という言葉を愛され、それを身をもって実践されました。「高師出より上の資格をとろう」「高等学校（旧制）の先生になろう」という稲田先生の「立志」が十八歳の尋常小学校准教員の試験から十二年間、教員として勤めながらの厳しい受験勉強の「立行」を支え、遂に三十歳にして、検定試験の最上級資格をとられました。つまり帝大卒と同格の旧制高校教員資格（いまの大学教授）の栄冠を手に入れたのです。当時の『文検受験生』という雑誌に「今回（の合格で）で教員の最低の資格から最高の資格までみな検定でとられた驚異的な検定学徒である」と紹介されている。まさに立志伝中の人です。「学歴とは修学の経歴であって、在学の履歴ではないはずです。どの学校に何年間在学したかより、どのような学問をどこまで身に

つけたか、が大事だと思います」。これは豊浜町教育会会報の「豊浜に憶う」の中の一節です。戦後の新制大学で安逸を貪り、やわな勉強しかしてこなかった私にとっては、本当に耳の痛い話です。この私にとっては後悔先に立たずの話ですが、若い世代には、今こそ、その立志立行の人生訓を学び・生かしてほしいと痛感します。その点では、稲田先生の伝記に心を打たれた高校生の反応は、若い人達がいまその様な教師像を求めていることの証査ではないかと、むしろ、頼もしくも勇気づけられます。

そして、この立志立行の姿勢は大平総理の歩まれた求道者の人生にも一脈相通じるものがあります。例えば、昭和十一年、大蔵省に入省した先輩として高松高商の後輩に高等文官試験受験の心構えを説いた「高等試験断想」（『在素知賢』大平財団刊行）を以前に読んだ時、その立志立行の気迫に満ちた勉強の仕方と不屈の精神力に同じような凄さを感じたことをいきたいと思います。大平総理が稲田先生を生涯の師と仰ぎ尊敬をされた所以の一つはこの辺の共感にあったのではないのでしょうか。いわゆる戦後民主主義教育の失敗の一つは、この様な立志立行の姿勢を「立身出世主義」という極めて世俗的な処世術として不当に貶め抹殺したことです。その結果が今日の教育の荒廃を招いているとすれば、立志立行の人生をひたすらに歩まれたお二人の背中を見て学ぶがごとき、全人的な教育の復権を祈るや切であります。

二通の書簡は関連資料とともに地元の記念館に展示へ

大平総理の二通の手紙は、今年の春、ご長男・稲田直樹先輩（三菱化工機㈱専務）から手渡されました。久し振りに先輩と昼食を共にする機会を賜ったときです。昨年八月、お父上が九十六歳で亡くなられた遺品の整理のなかで、お父上が家宝として保管されていたものの一つでした。稲田先輩にとっても引き継ぐべき貴重な遺品だが、手紙の内容からすれば大平総理を偲ぶ資料として大平財団で保管してもらう方が良いのではないかとのお申し入れでした。二通の書簡とともに市川学園新聞特別号一部と先生の著書『あした葉』（昭和五十五年刊）とその前後に出版された『国語教師五十年』（昭和四十四年刊）、『米寿記念録』（平成三年刊）をお預かりしました。内容を拝見しての感銘はすでに本文に書いた通りです。大平総理を偲ぶ貴重な資料であり、稲田先輩のご厚意に甘え、大平財団で大切に保管させていただくことにしました。この資料価値からすれば、広く来場者の皆様に見ていただくべきものであるとの判断から、地元の記念館に資料一式の展示を検討中です。お二人が和田村で同郷であることからすれば、観音寺市の「大平正芳記念館」よりも豊浜町文化会館内にある「豊浜町・大平記念室」の方が良いのではないか、ということ、近々、豊浜町とご相談する予定です。

二十年間の空白への悔恨とご遺族への謝意

ご自身や身内の自慢話し乃至は晴れがましいことには極端に口が重い稲田直樹先輩のご性癖は、この陰徳陽報につながるがゆえに魅力的で、私が長年に亘り先輩を尊敬申し上げてきた理由の一つでした。しかし、今回だけは稲田先輩のそのご長所を恨みました。せめて市川学園新聞の特集号が出た直後に、その写しでも送ってくれていればと、悔やまれたからです。勿論、その当時、大平総理志げ子夫人もご健在であり、まだ現役でご活躍中の稲田先生とのご交流も実現した筈でしょうし、大平総理の毎年のご命日に開催される財団の大平正芳記念賞授賞式にもご招待申し上げることができた筈だからです。でも、二十周忌の『去華就実』の発刊の年に、二十年ぶりに二通の手紙が届けられたことの意義が、その悔恨を補って余りあることは、既に小文の本論で書いた通りです。遅まきながら、この六月には、果たせなかつた授賞式へのご出席を故稲田先生に代わってお子様方にお願ひして、先生へのせめてもご供養と感謝の気持ちに代えさせていただきます。誌上を借りて、稲田先輩と弟さん・妹さんに心から感謝申し上げます。

おわりに

以上、大平総理の絶筆とも言うべき、資料としても貴重な二通の手紙の物語をご紹介させて頂きました。これに加えて、私なりの大平論をもっと書いてみたのですが、既に紙数も時間も尽きてしまいました。別稿で、毎日新聞の中田章氏（観一・8回卒）が立派な大平論を書いてくれていますので、それに免じてお許し下さい。

戦後教育の数多くの失敗のうち最たるものの一つは歴史教育です。イデオロギーで歴史を解釈・断罪する史観の横行で、歴史を担った人間の役割が捨象されました。言ってみれば、英雄伝、偉人伝、聖人伝の受難時代でした。その間、司馬文学が国民文学と呼ばれ人気を博したのは、勿論作者の力倆によるものですが、戦後の歴史教科書に国民が飽き足らなかつた反動だったことも否定できません。いま、急速にその反省が起っています。

その意味で、各種同窓会誌にも、母校の歴史、人物列伝などが取り上げられ始めていると聞きます。その流れの中で言えば、大平総理についての論客は、真鍋賢二参議院議員を別格として、わが同窓生の中に沢山おられます。全国広しといえども総理大臣を輩出した高校の数は限られています。本誌上でもっとも誇らしく顕彰の論陣を張ってもらいたいもので

す。併せて、ほかにも多くの分野で活躍された諸先輩の人物列伝を大いに取り上げてほしいものです。立派な先輩を数多く輩出した歴史と伝統を誇る母校を持つ同窓会だけが持ち得る特権であり義務でもあると思うからです。高度成長期に都市化した東京近郊の人口急増のベッドタウンの新設校を卒業した私の子供達の同窓会と比べてみるにつけても、日頃は空気のような存在のわれらが同窓会の伝統の重みと貴重さを痛感するからです。めでたく創立百周年を迎えた母校、同窓会、そして『燧』の更なる発展を祈りつつ筆を措きます。

讀後 時下、愈々御清健に涉らせられ、慶賀の至に存
此、慶賀の至に存じます。

多し、本日、貴著『あした葉』御惠投に預かり、

誠に難有、厚く厚く御礼申上げます。日頃は御無沙汰

状、御用ひで全く汗顔の外なく存じていますのに、お忘れ

れお出しなく、御芳誼を頂き、感激の他ございません。ちよう

ど明後三十日より九日間北米中南米方面に出向きます

ので、機中絶好の読物を得ていささか心が躍つており

ます。

何れ読後改めて御礼申上げる所存ですが、不

取敢思わざる御芳情に接した喜びをお伝えいたしま

す。

先は右要々御礼まで。御令至様によりしくご鳳声下

さいませ。

不 一

四月廿八日夜 大平正芳 拜

稲田伊之助 先生 玉案下

お

前略
 先般御恵投頂きました『あした葉』、偶々過
 般外遊中五十八時間機中におりましたので、楽しく読
 ませて頂きました。
 私が驚きましたのは、稲田先生の御記憶の強さ、正
 確さです。私など幼少の頃の記憶が不確かであるのに
 比して、先生のその正確さには只々舌を巻く次第で
 す。次に用語が平易、表現が簡明。これこそが正に達
 人だという感嘆の思いで一杯です。それよりも何より
 も、先生の人間に対する思いやりや愛情の深さに痛く
 感銘するとともに、先生御自身の清涼な人生が
 崇高なものであることに羨望の思いさえ感じた次第で
 す。本当に御恵投有難うございました。
 どうかいつまでも御健勝で、われわれ後進を御教導
 下さいますようお願いいたします。先は御厚礼まで。
 不 一
 五月二十日早朝
 大平 正 芳 拜
 稲田伊之助先生 玉案下

前略
 先般御恵投頂きました『あした葉』、偶々過
 般外遊中五十八時間機中におりましたので、楽しく読
 ませて頂きました。
 私が驚きましたのは、稲田先生の御記憶の強さ、正
 確さです。私など幼少の頃の記憶が不確かであるのに
 比して、先生のその正確さには只々舌を巻く次第で
 す。次に用語が平易、表現が簡明。これこそが正に達
 人だという感嘆の思いで一杯です。それよりも何より
 も、先生の人間に対する思いやりや愛情の深さに痛く
 感銘するとともに、先生御自身の清涼な人生が
 崇高なものであることに羨望の思いさえ感じた次第で
 す。本当に御恵投有難うございました。
 どうかいつまでも御健勝で、われわれ後進を御教導
 下さいますようお願いいたします。先は御厚礼まで。
 不 一
 五月二十日早朝
 大平 正 芳 拜
 稲田伊之助先生 玉案下

大平首相の書簡について

故大平首相の書簡二通は私が近著『あした葉』を進呈したのに対する礼状であります。四月十八日に発行したこの自伝を、私は二十四日に首相の私邸あてに郵送しました。折返し二十八日付で投函されたのが第一の手紙であります。文中にある通り、翌々日（30日）首相は旅に出ました。九日間の予定で、アメリカ・メキシコ・カナダと各国の元首を歴訪し、途次ユーゴスラビアに飛んでチトー大統領の国葬に参列し、西ドイツにシュミット首相を訪問し、予定より二日おくれて五月十日に帰朝しました。国内の政局は極度に緊張し五月十九日には衆議院が解散され、引続き総選挙になりました。「五月二十日早朝」という日付の第二信は第一信にある約束を守るべく、苦悩に満ちた中で慌しく筆を走らせたものと思われます。字面にまでそれが現れております。誠実な、律儀な人柄の現れで、こんなに忙しい、こんなに責任の重い人に、こんなに手紙を書かせて、相済まぬことをした、悪いことをした、これが私の実感です。十日後の三十一日に虎の門病院入院。六月十二日早朝遠逝、これは記憶に新しいところであります。

私は首相と同郷同村の生まれで、香川県三豊郡豊浜町和田小学校の同窓であります。六歳後輩の首相が、和田小学校尋常科一年に入学した時は、私は高等科の一年生でした。上級生として見られていた訳であります。私が末席の教師として母校に就任した時は、首相は高等科の一年生でした。未熟な青年教師の私が、あぶなつかしい足どりで一生懸命に教えていた姿が、大平少年のすぐれた心の琴線に触れたのでありましようか。その後は行く路を異にし、苛烈な政界で活動する首相と教師の道を平凡に歩む私は語

り合う機会も少くなりました。首相は、しかし忙しい中にも、先生としての私に敬愛の情を寄せてくれました。

首相逝去が報ぜられた日学校長古賀先生は私をお呼びになり、痛惜の辞を述べてくださいました。二通の書簡をお見せすると、うなずきながら何回か読み返され、人と人との心の触れ合いの深さ、師弟の縁の不思議さ、教育の道の奥深さ、学校生活という、甚深微妙な世界について語られました。旧師にあてた故首相の二通の書簡は、これをそのまま写しとって永く学校に保存しようということになりました。そのおことばに応じ、故首相も、天国で静かに微笑されるだろうと思います。

昭和五十五年七月

市川学園講師

稲田伊之助しるす

『週間現代』（2018年12月25日発売）のグラビア
「著名人の直筆手紙」で紹介される



けん てき こう

硯滴考 [5]

令和元年九月吉日 発行

発行者 公益財団法人大平正芳記念財団

〒102-0082

東京都千代田区一番町 10 番地 相模屋第二ビル 5 階

TEL : (03) 3230 - 2213

FAX : (03) 3230 - 2214
